正し屋本舗へおいでなさい

剣岳　鳳哉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正し屋本舗へおいでなさい

【Ｎコード】
Ｎ０３３４Ｙ

【作者名】
剣岳　鳳哉。

【あらすじ】
就職活動をしていた江戸川（えどがわ）　優（ゆう）は、ベタな出会いから「正し屋本舗」という少し特殊な職場へ就職した。「正し屋」の仕事は依頼人が持ち込む依頼を解決すること。
優はここで雑用兼見習いとして癖が強すぎる上司に弄られながら、妖怪や幽霊といったかなり特殊な仕事に向き合っていく。
癒し成分はもっぱらペット（？）の雀と狛犬たち動物類、そして甘味の日々。

ありきたりといわないで（前書き）

誤字脱字には十分注意しているつもりですが、もし誤字脱字などがありましたら報告していただけると幸いです。

あまり描きなれていないので色々と読みにくいところもあるかもしれませんが、精進していきたいと思っています。
暇つぶしにでも読んでいただけると嬉しいです。

ありきたりといわないで

慣れない重さと大きさのビジネスバッグが、私に現実を突きつける。

手に持っているビジネスバッグは男の人用なので持ち手のところが凄く持ちにくい。
ビジネスバッグはケチらないで新しいの買えばよかったって何度思ったことか！

でも最大の敵はビジネスバッグじゃなくて、ヒールだ。

ヒールなんて履きなれてない所為で、叫んでゴロゴロ転がりまわりたいくらいきつい。
足全体の痛みがそろそろ無視できない状況になりつつある。

しかもそこに天敵である、動きにくくて快適さとは無縁のスーツが加わるんだから恐ろしい。
色が黒いから太陽の光は吸収するし辛いのなんのって。
移動するときは普通の靴とジーパン、着替えやすい恰好のほうがいいかも。
会社の近くに来たら着替えればいいよね。

げんなりと人が行き交う街中でうなだれている私の名前は江戸川優（えどがわ ゆう）といいます。
某眼鏡の少年とは何の関係もない、しがない田舎者ですとも。
これだから都会は、なんてぶつくさ八つ当たり気味に呟きながら立ち止まって天を仰ぐ。

「（う〜あ〜……なにこれ、凄くあっづいんだけど）」

ビルの隙間から見える雲一つない快晴は、今の私にとっては泣きたくなるくらい憎いあんちきしょうだ。
体中が水分を要求してる。特に喉とか口の中とか。
乾物の気持ちがわかる一歩手前ってところかなぁ。

「（にしても、完全に就職活動を侮ってた）」

友達から就職活動が大変だと聞いてはいたけれど、まさかここまでとは。
あんまり器用なほうじゃないから勉強と就活を一緒にやる自信がなくて勉強を優先してたんだけど話だけでも聞いておくんだった。

次々に就職を決めていく友人たちに焦り始めたのは5日前。
まずは就職を支援している短大の就職課や公共機関を利用したんだけど、結果は――――言うまでもない。
受かってれば、今こんな恰好してないもん。

「（ここは絶対大丈夫って言ってた就職課のおばさんが最後には神社でお祓いを受けてきなさい、だもん。ついてない以前の問題だよね……面接練習だって一発だったのに）」

はぁ、と盛大なため息と一緒に肩が下がる。
ううう。朝から歩きっぱなしだった所為で足は重いし、何十社も会社回ったけど全部落とされるし、本気で一回お祓い受けてこようかなぁ……？

「そういえば、お昼ご飯もまだだっけ」

気づいてしまえば物凄く何か食べたくなってきた。
美味しいミートソースのパスタでもいいし、野菜とキクラゲが入ったラーメンも捨てがたい。
ああ、ハンバーグとかもいいなぁ。
脳裏をよぎるお昼ご飯候補にうっかりよだれをたらしそうになった。危ない危ない。
今にも泣きだしそうなお腹を二、三回撫でてから気合を入れなおす。

（目標！食べ物のあるお店！目指せ！安い・美味い・早い！！ついでに美味しいデザートがあると文句なしの追加点！！）

えいえいおー！と心の中で自分を叱咤激励？して、棒切れを通り越して電柱のようになった足に鞭を打って歩き出す。
でも、うん……現実ってやっぱり甘くない。
そんなの親が事故に巻き込まれて死んだり、テストで山を張ってたのに外した時とかに思い知ったけどね。中学生、高校生、大学と何度、数学のあんちくしょーに泣かされたかッ！！
数学なんてヤマが当たらない限りどーにもならないよ。

「（せっかく、色々応援してもらってるのに……なんで私って要領悪いっていうか頭悪いんだろ）」

高いビルや無機質な色のコンクリートに囲まれた、息苦しい灰色のジャングルで飲食店を見つけるのはとても難しい。
ビジネスバッグの中には地図なんてない。
目標の会社にはタクシーの運転手さんやらおしゃべり好きのおばさま方に教えておらってどうにかたどり着けていたんだけど……周りには忙しそうに速足で歩くビジネスマンやらビジネスウーマンしか見当たらない。せめて、コンビニがあればいいんだけど、コンビニがありそうな雰囲気はまるでない。

「前途多難すぎる……うぅ、もっとしっかりしないとなぁ」

脳裏をよぎるのは数々のネタ、もとい失敗談。
昔から抜けてるせいで普通の人はしないらしい失敗が多かった。
友達はそんな私を心配したりどうしようもないなーなんて言いながらも色々手伝ってくれたんだよね。
私から言えば皆がすごくしっかりしてるだけだと思うんだけど。

「（応援してもらってるんだもん、頑張らないと）」

大丈夫、私はついてる！
特に人間関係は、うん、ついてる。他は色々不足してるかもしれないけど。
にしても、難儀な世の中だなぁ。
友達には恵まれてるし、親が亡くなったとはいっても祖父母がちゃんと育ててくれた。
今はもう育ての親の祖父母も亡くなったけど、高校の先生が凄く姉御肌？で色々アドバイスや手続きをしてくれたから大学にだって行けた。……奨学金という名の借金はあるけど、仕方ない。
他にも近所の人にもよくしてもらえていたのに、私は何も返せないまま就職すらままならないこの現実。
うぅ、ホント申し訳ない。

「（学生の時はそれなりに大変だったけど、楽しかったなぁ。うぅ、すっごく戻りたい）」

大きな大きなため息を吐いて、足元に置いていた鞄を手に取った。
何だか私を追い越していく人たちが皆、すいすいと前に進んでいくような感覚に陥った。
自分なりに“止まってはいけない”と思って足を前に動かし続けてみても、結局は止まったままで。
って、うわー……私、今まで人様に迷惑しかかけてないような気がしてきた。

「ハローワークに通うより新しい求人誌買って特攻した方が確実かも」

鞄から取り出した求人雑誌を握りしめる。
表紙にでかでかと書かれている煽り文句が、ものすごく憎たらしい。
雑誌からしたらとんだ八つ当たりなんだろうけれど、それにしたって“これで決まり！”なんてと軽々と表紙に書くものじゃないと思うんだよねッ！
ぐぬぬぬ、編集者に会う機会があったら絶対ぜーったい！

「（私が総理大臣並みに偉くなったら文句言ってやる！）ふ、ふふふふふ……！」

暑さと疲労と空腹のトリプルダメージで思考が普段以上に支離滅裂になってる気がするけど、もう知らない。
大体なんでビルばっかりなの！喫茶店の一件くらいあってもバチはあたらないとおもう！

この時の私がもうちょっと冷静だったら、人が行き交う道のど真ん中で拳を握りしめて笑うなんてしなかったんだけどね。要反省だね、うん。毎回学習しないけど！

太陽光でジリジリ焼かれていた私を現実に引き戻したのは全身に感じた衝撃。

手が、熱い。
小さくて硬い何かが掌に刺さって地味に痛いのと、何故か凄く熱い。
あと体に感じる異常は、お尻がジンジンして……やっぱり痛いってことくらいだ。

えーと、もしかして私、電柱か看板にぶつかった？

チラチラと周りの人たちが尻餅をついてるらしい私と正面にある“何か固いもの”へ向けられていた。

勿論、周りなんてまるで見えていなかった。
数秒経ってから自分が尻餅をついた無様な格好でポカンと口を開けていることを自覚する。

「（あれ、もしかして私ってば今、民衆の面前で間抜けにも尻餅ついてる…？）」

じわじわこみ上げる羞恥心と闘いながら恐る恐る周囲を見渡す。
つい先ほどまで私のことなんて眼中にもなかったように歩いていた人達がチラチラ視線を送っていました。
でも、その対象は私ではないらしい。
全くじゃないけど私のことはちらっと視界に収めてすぐに別のモノへ向けられている。
だって、視線が地面に座り込んでる私に向いてないのだ。

「（なんか、ずいぶん大きかったしもしかして看板とか電柱にぶつかった？）」

恐らく私が激突したのは大きなものだ。

それが看板や電柱でないことを祈りながら天を仰ぐ。

顔を上げた私は、こうしてベタで使い古された感じの出会いを果たしてしまったのである。

ありきたりといわないで（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！
次も最後まで読んでもらえるように頑張ります！えいえいおー！

食いしん坊といわないで（前書き）

個人的に実際に出会って一番困るタイプ＝美形。

絶対にいたたまれない。穴掘って隠れたい。

食いしん坊といわないで

結論から言おう。

ぶつかったのは人間だった。

思わずヒクリと口元がひきつる。

あっけなく地面と仲良くなった私の目の前にあったのは、電柱でも看板でもなかった。

アスファルト越しに伝わってくる熱と尻餅をついた時にぶつけたらしいお尻が、残念ながらこれが現実であることを教えてくれている。

ぶっちゃけ、有難迷惑だったりするんだけどね！

「（顔、あげるんじゃなかった……！！）」

後悔しても後の祭りだってことは、さすがの私でもわかったよ。
だって、相手がわざわざ屈んでるんだもんね！
……あの私なんて路肩の石ころだとでも思って、華麗にスルーしてくれると非常に助かるんですけど。
これが言えたらどんなにいいことか。

ちらっと差し出された手から周囲に視線を向けると、速足に歩いていたはずの人たちが好奇心丸出しで私に注目してる。
足を止めてるのは女性が多いのは、たぶん私がぶつかった人の所為

だ。
どーしてくれる、こっ恥ずかしいよ！

眩暈に似た症状を覚えて、とりあえず頭をぶんぶん振ってみた。
少しすっきりしたけど、やっぱり注目されるのって好きじゃないなー……なんか変な汗が凄いよ。

とりあえず、いつまでも座っている訳にはいかない。
それにさっきから目が合ってるような気がするんだよねー。
逆光で見えないんだけど、眼鏡がキラめいてるし、空気も心なしかキラめいてる。
たぶん、これが美形オーラってやつだ。だって自慢の女友達もこんなキラキラしたオーラまとってるもん！

……これで、心の奥底にあった「もしかしたら、強面のおじさんかもしれない」という怖すぎる脳内候補は消された。むむむ、美人のお姉さんだったらいいんだけど、シルエットからして男の人だしなぁ。

「すみません、大丈夫でしたか？」

頭は一応働いてたけど、間抜けにも口をあけたまま固まっている私に何かが差し出される。
とりあえず、ティッシュじゃないことだけは確かだ。

「どこか怪我でもしましたか？でしたら、病院へ……――――――――」

「だ、だだだ大丈夫です！なんのっ、なんっの問題もないです！」

差し出されたのはティッシュなんかじゃなくって、綺麗な手だった。
一瞬、この人は手のモデルでもやってるんだろうかと思ったけれど、そうではなさそうだ。
声や物腰の柔らかさからして……お、おじさんのほうが良かったかもしれないなぁ！！

ごくり、と思わず生唾を飲んで身構えた私の脳裏によぎる一抹の不安。

「（ま、まずいよね、これ！じ、事務所の人とかファンの人に殺されるんじゃないだろうか）」

個人的に期待するのは、キラキラオーラは持ってるけど顔は普通の好青年だよ！みたいなオチ。
大概は、そうなってる筈だ。
街中に美形がゴロゴロしてる筈がない。女の子やら女の人は美人さんとか可愛い子率は高いけど、男の人ってそんなにレベル高い人いないって相場は決まってる　　らしい。

「――――――――――…そう、ですか。では、ここは人目がありますし、ぶつかったお詫びをするなら落ち着いて話せる場所の方がいいでしょう。荷物はこれだけですか？」

「荷物はそのバッグだけですけど……え?!こ、この近くに食べ物屋さんあるんですか!?」

「喫茶店ならありますよ。見つけにくいところにあるので、普通に歩いているだけではたどり着けない筈です。随分、歩いたみたいですね」

差し出された手をひっこめてもらって、私は自分で立ち上がった。知らない、しかもキラキラオーラをまとった男の人の手を握って立ち上がれる度胸なんて微塵もない。
後で握手料とか請求されても困るし。

目の前の人は、落ちていた鞄を拾って服をたたいている私に差し出してくれた。
ついでに、握りしめた所為でよれよれになった求人雑誌も、渡して

くれたんだけど……その時に私は初めて相手の顔をしっかりとみた。

「（うん、見なきゃよかったな！アンタいる場所間違ってるよ！スタジオへ戻れ！ハウスっ！）」

もちろん、口になんてだせやしない。
出した瞬間に私はこの世に命を受けたことを後悔する羽目になると思ったから。
首謀者？そんなのファンの人たちに決まってんじゃないですか。

だれだよ、こんな眼鏡美人連れてきたの！！
街中に不釣り合いなとんでも美形連れてこないでよ神様！凄くいたたまれないよ！
生まれての方、普通くらいの容姿で生きてきた私にはかなりひどい仕打ちすぎる。

私はこの人がテレビやら雑誌やらに出てても驚きはしないね、うん。

「そ、そうなんです！結構歩いて疲れちゃったのでもう家に帰ろうかなーって思ってたところなんですよ。だから、お詫びとか全力で大丈夫なので、どうぞお気になさらず目的を果たしてください。こちらこそ、その、本当に失礼しました。今度から車と電柱と自転車、ついでに道行く人には気を付けます」

「そうですね、配慮に欠けていました。歩き通しでは疲れていて当然です。丁度、タクシーが来たのでこれで移動しましょうか」

そりゃないぜ、神様。

運よく?通りかかったタクシーを捕まえた彼はキラキラした笑顔を浮かべて、どうぞ、と私をタクシーへ誘導した。
つまり、もう逃亡は不可能だ。
逃走経路は完全に断たれて、状況は色々と絶望的。勘弁してほしい。

るーるーるるー、と思わず遠い目になってタクシーの窓から空を見上げるけど、少しだけ視界が霞んでいた。
ぐすん。これは心の汗なんだ、きっと。

隣に座った彼は運転手さん相手に、これでもかといわんばかりの気品と優雅さ、ついでに金持ち感をばらまきながら行く先を指示している。
運転手さん、運転手さん、驚いてるのはわかるけど、口は閉じないとそのうち、涎でてくるよー。

「喫茶店には、5分程度で到着する予定です。飲み物だけではなく、軽食もあるのでそこで何か食べましょうか。オムライスや自家製パンのフレンチトーストが評判だと聞いています。デザート類も美味しいですよ」

「と、特に人気なのは？」

「アップルタルトと焼チーズタルトですね。どちらも何度か雑誌に載っていますよ」

隣の座席に座っている美形さんが言った言葉に思わずガッツポーズ。

私は、甘いものが大好きだ。

愛してるし、奴らはもはや主食であると日頃から声高らかに主張している。

ある種の極限状態にいた私にとって甘いもの　――――　しかも、美味しいときた！　――――　にありつけるというのだからガッツポーズだってうっかりしてしまうと思う。

「甘いものがお好きなんですね」

「好きじゃないです、愛してます。四六時中いっしょにいて、できればお墓の中までお供願いたいと心から思っています」

「これまで多種多様な方々を相手にしてきましたが、甘いものに対して愛を囁く人は初めてです」

ふふふ、となんだか珍生物を見るような視線を頂戴した。
不本意とはいってもこの手の視線には慣れているので、きれいさっぱり受け流す。
脳内を占めているのは、果てしなく甘美なスイーツたちの調べ。
うああ、どんな味がするんだろう！携帯電話と甘味との運命的な出会いを記録するノートを持ってきててよかった！！

テンションがぐぐぐーんと頂点に近い位置まで上り詰めていた私は、タクシーが止まると同時に財布に手をかける。

さっさと料金を払って甘味のもとへ行かねば！

「タクシーを止めたのは私ですから、私に払わせてくださいね」

「いやいや、相乗りって基本的に割り勘ルールが発動しますから！」

「わかりました、次からは考慮させていただきます」

さ、どうぞ。と、いつの間にかタクシーから降りた彼は、私が下りるべきドアの前にいた。
瞬間移動か！と戦慄した私は気づけば手を取られ、ついでに荷物も確保され、あれよあれよという間にビルの中へ。

どこからどう見ても、普通のビルだ。
地下へ降りる階段を下りて、どこの迷路だと悪態の一つや二つや三つつきたくなるような道を歩く。
初めは一生懸命、道を覚えようとしたけど5回ほど左や右に曲がった時点で諦めた。地図があっても迷う。

「隠れ家的なお店ですねー。だけど、こんな立地条件の悪いところにあってお店やっていけるのかなぁ」

「それについても、お話ししますよ。まずは中に入りましょうか……お腹も空いているようですし、ね？」

「自己主張が激しいお腹の住人でごめんなさい」

「これだけ期待されれば店主も料理も嬉しいと思いますよ」

美味しい匂いに触発されたらしい腹の虫という名の住人が歓喜の悲鳴を上げた。
うぅ、少しは状況を考えて鳴って欲しい。
とっさにお腹を押さえたものの、過ぎたものはどうしようもない。

楽しそうな声に少しの居た堪れなさを覚えたけど、ソロソロと彼のあとを追うようにアンティーク調の扉をくぐった。
少しだけ気になったのは、窓枠の中心に鏡がはめられていたこと。
店に入る前に身だしなみをチェックしろってことかなぁ。

スーツ着てるし、…追い出されたり、はしないよね……？

食いしん坊といわないで（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！
次も最後まで読んでもらえるように頑張ります！えいえいおー！

世間知らずといわないで（前書き）

基本的に、怖い話は好きだけど怖いモノは嫌いです。

あ、あと色眼鏡（サングラス）とコンタクトレンズも嫌いです。

世間知らずといわないで

見知らぬ眼鏡美人に連れられて、足を踏み入れた喫茶店はとても雰囲気のいいお店だった。

地下にあるのに、暗いとかジメジメした雰囲気はまるでない。

店の中に足を踏み入れた瞬間、どこかで嗅いだことのある香りが鼻をくすぐった。

食べ物の匂いは全くない。

ただ、お店全体に薫っている凛とした清々しい匂いに疲れが少しずつ溶けていくような感覚がした。

知っているのに答えが出てこない、独特のもやもや感にムッと眉間に力が篭る。

「あの席に座りましょう、落ち着いて話すには丁度……――――――　どうか、しましたか？随分険しい表情をしているようですが」

「へ？そ、そんなに酷い顔してました？！」

「酷い顔、ではないと思いますが眉間に皺は寄ってましたね」

こーんな顔でしたよ、と茶目っ気たっぷりに再現してくださったのはいいんだけど……顔のつくりが違うので正直比較の対象にはなりません。
彼には美形補正があるかもしれないけど、私にそんな素晴らしいものは一切ない筈。
だからもっと歌舞伎役者みたいな顔になってたと思うんだ。

「お見苦しいものをお見せして大変申し訳ございませんでした。あの、この香りなんですけど……何の香りなのかわかりますか？どこかで嗅いだような気がして気になってるんですけど、答えがでなくって」

「ああ、この香りは“菖蒲（しょうぶ）”の香りですね。少し他のモノが混ざってはいますが悪いものではないので、安心してください。食事をしたり会話をする程度なら何の問題もないでしょうから」

上品で穏やかな笑みを称えた美形は、何をしても似合うらしい。着物姿で洋風の喫茶店にいるにもかかわらず何の違和感もありゃしないのだ。

ときどき、神様って本当は不公平なんだって思うよ。そのキラキラの一つでも私に渡してくれれば、買い物するときに便利なのに！

一番奥の席に座った私達を見張っていたかのように、コックの恰好をした人が近づいてきた。

あくまで「コックの恰好」をした人だと私は思った。

だって、脳内で描いていたコックさんのイメージをことごとく覆しているから。
筋肉隆々の厳めしい体つきに違わない、山籠もりから戻ってきたばかりのような風貌。
髪は撫でつけてあるものの、無精ひげはいただけないと思うんだ、私。

「久しぶりに顔だしたと思えば、なんだァ？このちまっこいのは」

ザ・超重低音。

私たちが座っているテーブルの横に仁王立ちする大男さんから発せられた声はまさしくそんな感じ。
コックさんの服より、ヤのつく職業の人が着てる服の方が凄くイメ

ージにベストマッチだよ！
うっかり壁際ににじり寄った私に気付いたのか、大男さんはジロリと高い位置から私を見下ろした。

「ひっ…？！っ、すいませんごめんなさいもうしません逃げませんから命だけは甘いモノ食べるまでとらないでください」

「誰が食うか…ッ！ッチ。おい、須川！なんだこのちびっこいの！依頼人をここに連れてくんじゃねーって何度言やぁわかんだァ？」

「おや？私がここに依頼人を連れてきたこと、ありましたか？ここにいる客が偶々、依頼人になったことは何度かあったことは記憶していますが」

「……そーいや、今日はお前ら以外客はいねぇんだったな。んじゃあ、なんだ、このちまっこいの」

どうやら、このおっかない人は眼鏡美人さんの知り合いらしい。
それはわかったけど…私、もしかしなくてもとんでもない人についてきちゃったんじゃないだろうか。

「後で話しますよ。それより、私はいつものをお願いします。彼女にメニューを渡してあげてください、あとお茶もお願いしますね」

「しゃーねぇな、ちょっと待ってろ」

相変わらずキラキラしい笑顔を浮かべた眼鏡さんに、大男さんは盛大なため息をついた。
衝立の向こうへ歩いていく巨体を観察しながら私は息をひそめる。
いや、なんか目があったら何かが終わるような気がしたんだ。

私が戦々恐々としている間に、お水が入ったピッチャーとお洒落なグラス、メニューらしきものを持った大男がテーブルにモノを並べていく。
ことのほか、手つきが優しくて少しびっくりした。

「ほらよ。今日はオムライスセットがお勧めだ。値段は高いがどーせ、須川の奢りだろーから高いモン頼んどけや」

「高いといってもこの店じゃたかが知れてるでしょう。全く……これでいいですか？では、このお勧めとアップルタルト、焼チーズケーキをお願いします」

「お前はいつものだろ？で、ちまっこいの。飲み物は？」

「……アールグレイのミルクティーで」

自分の背が高くて力持ちそうだからって馬鹿にするな！アリんこもミジンコも必死に生きてるんだよ！

そういいたくなるのをぐっと堪えた私は偉い。

大きな背中が店の奥へ来ていくのを確認した私は、すかさず彼が何者なのかを聞いてみたんだけど、返事はあっさりしたものだった。

「この店の店主ですよ。ここまでくるとどちらが本業なのか分からなくなりますが……ああ、そういえばまだ私も名乗っていませんでしたね。私は、こういうものです」

どこからともなくシンプルで無駄に高そうな名刺入れを取り出した彼は、一枚の紙を私の前に置いた。
一瞬、名刺ってどんなだっけ？なんて間抜けなことを考えたのは言うまでもない。

「（なに、この高級和紙使用の名刺。こんな手の込んだものみたことないんだけど）高そ……ええと、綺麗な名刺ですね」

「そうですか？まぁ、あまり手の込んだものではありませんが」

「普通の名刺は持った時に色変わらないと思います。しかもこれ、和紙でできてるんですよね？うはー、すごいなぁ……日本の技術」

初めはふつうの和紙だったのに、手に持ったところからサーッと色が透けた。
透明なアクリル板に和紙状の模様を加工してあるみたいだ。
それだけならいいんだけど、花の透かしまでは言ってるんだから驚きもの。
最近の職人さんはすごいなぁ、なんて光沢のある墨で書かれた名刺を透かしたり軽く振ったりしてみたけど元には戻らなかった。

「須川　怜至、と申します。貴女のお名前をお聞きしてもいいでしょうか？」

「え？あ、はい！すみません……えーと、私は江戸川　優といいます。名刺とかはまだ、その、持ってないので渡せないんですけど……って、そうだ！ちょっと待ってください」

就職先が決まってから作ろうと思っていたので名刺なんてないけど、名前くらいはしっかり伝えておきたい。
メモ帳に書くっていう手段もあったけど、おもしろい名刺を見せてもらったお礼には程遠いから、面白味はないモノのそれなりに丁寧な字で書いた名前を見てもらうことにした。

「はい！いっぱい書いたのでどうぞ」

「……履歴書、ですね」

「丁寧には書いてあるので読める時にはなってるとおもうんですけど、さっきの名刺に比べたら面白味がないですよね」

「いいえ、私にとってはとても面白いものですよ。ありがとうございます」

綺麗な笑顔を浮かべて、履歴書を受け取った眼鏡美人こと須川（すがわ）

怜至(れいし)さんは熱心に私の履歴書を読み始めた。
少しだけ緊張するけど、面接を受けてる訳じゃないのでずいぶん気楽だ。
あーあ。他のところでもこんな風にリラックスして面接受けられたらよかったのにな。みーんな怖そうなおじさんなんだもん！
少し手持無沙汰になった私は、改めてじっくりもらった名刺を見ることにした。

「あの、ここにかいてある“正し屋本舗”って社名ですよね？モデル事務所か何かですか、やっぱり」

「事務所はあっていますが、モデル事務所ではありませんね。簡単に言ってしまうと何でも屋、みたいなものです。少し特殊かもしれませんが、それなりの収入はありますよ――――――――…興味が？」

「ありますー！どんなことするんですか？やっぱりペット探したり、浮気を突き止めたり、犯人を尾行したりするんですか？」

「似たようなことはしていますよ。人を探したり、物を探したり、場所を特定したり――――――…といっても、江戸川さんが考えているような方法ではないとおもいますが」

「へぇー、なんだか探偵みたいな仕事なんですね」

ほんとにあったんだ、とお水を飲む私に須川さんは苦笑して、懐から何かを取り出した。

深緑色の布に包まれていたのは写真。

若い男女の写真から子供が映っている家族写真、ペットを取った写真、家の前で記念撮影をしている写真、観光地でとられたと思われる写真……とまぁ、統一感のない写真が３０枚近くテーブルの上に広がった。

これだけみると、普通の写真屋さんか写真コレクターなんだけど――――――――……そういう、楽しい写真じゃないことはすぐに分かった。

「（なん、か……冷たくて、重い感じがする）これ、ってあんまりいい写真じゃない、ですよね？」

「――――――…その通りです。私の本業はこういったモノを適切に処分することであったり、目には見えないモノによって私生活がま

まならなくなっている方を本来の状態に戻す手伝いをしています」

「それって、もしかして……れ、霊能力者ってやつですか？」

「そういったものの一角でしょうか。まぁ、霊能力者や祓い屋、霊媒師、退魔士などという職業を生業（なりわい）としている者は、見えない方からすると胡散臭い職業でしょう？」

まさか本人を前にして「そうですね」なんて言えるはずもなく、とりあえず、曖昧な笑顔で濁しておいた。

でも、確かに須川さんはなんだか他の人とは何かが違う気がする。顔はいいし無駄にお金持ちそうだけど、そういうんじゃなくって……ここにいないみたいなのに、誰よりも近くにあるような、そんな不思議な感じなんだよね。

「他には、一二月祭り（じゅうにつきまつり）の手伝りもあります。命に係わる霊現象なんてしょっちゅうあるわけではないので、そちらの仕事は滅多にありません。代わりにそういった能力のある、もしくは“あると思い込んでいる”方の選定や斡旋でしょうか」

「な、なんか凄いことになってるんですね」

「最近はめっきり減りましたが、少しでも油断すると偽物やペテン師といったものが増えますからね。他にも問題としては依頼人の質、でしょうか。本当に困っているのか、それとも単なる気休めなのか……そのあたりの見極めも大切なんですよ」

どうやら、彼は霊能力者の紹介窓口に似た仕事もしているらしい。一通り聞いたのはいいけど、お腹が空きすぎていつも以上に脳みその働きが鈍っている気がする。
彼の言っていることは理解できなくもないけど、正直、かなり常識から外れているとおもう。

私はお化けとか幽霊はいるって信じてる方だ。
でも、進んで怖い目にはあいたくないし、遭(あ)おうとも思わない。
お化けや幽霊はテレビと本と口コミだけで十分だ。

……今更だけど、履歴書って名刺代わりになるのかな…？

世間知らずといわないで（後書き）

む、ちょっと短い…かな？

ここまで読んでくださってありがとうございました！

いいカモだなんていわないで（前書き）

書き終わったー！！と歓喜したのもつかの間、気づけばデータが消えていた罠（しかも2回連続で）

こ、これがしんれーげんしょーか！！（確実に違う

いいカモだなんていわないで

生き返った！と歓喜するのは、私の胃か脳か。

今の私は、今日一日の中で一番幸せだ。

空っぽになったお皿とティーカップを見て、ついさっき味わったばかりの極上デザートを思い出す。

程よい甘みのチキンライスがふわトロの半熟卵に包まれて、仕上げにキノコと野菜の旨みがたっぷりのデミグラスソースがたっぷりかかった美味しいオムライス！

付け合せの大根サラダもシャキシャキしてて美味しかったし、スープも野菜がゴロゴロ入ってほんとに美味しい。

そして衝撃的だったのは、リンゴタルトと焼チーズケーキ！

どっちもタルトの生地はサクサク。

チーズケーキの方は濃厚で舌触りは滑らか、甘いだけじゃなくてレモンと多分、柚子か何かだと思うんだけどその風味がこう、いい具合に口の中に広がって鼻に抜けてく。

リンゴタルトはリンゴの煮詰め具合もさることながら甘さと酸味のバランスが文句なし。

でも、お気に入りはなんといってもカスタードクリーム！すっごい美味しかった！なんだあのカスタードクリーム！もう2～3切れ余裕で入っちゃうよ！

二つともミルクティーによく合うし、私好みだし、是非ぜひテイクアウトしたい。

「すっごい、おいしかった……特にタルト！すごいですよこれ、絶対行列できますよ！」

「こんなに喜んでもらえるなら連れてきて甲斐がありますね。怪我もないようですし、安心しました。考え事をしながら歩くのは、やはりよくありませんね」

「わかります、わかります！私もよく、ぼーっとしながら歩いたり、半分寝ながら歩いたりすることがあるんですけど、そういう時に限って電柱やら看板にぶつかっちゃうんですよねー」

「よくあるかどうかは別としても、ああいう風に人にぶつかったのは初めてだったので、久々に驚きましたよ。不思議な縁(えん)もあるものですね」

偶然といえば、これは偶然。

でも偶然にしてはかなりの低確率だとおもう、お互いに考え事をしていて衝突するなんて。

これが漫画だと「この人は私の運命の人なんだわ！」とかってなるんだろうけど、相手を見て、それから自分の顔を鏡で見るべきだ。

「（これがドラマか漫画なら間違いなく相手だけじゃなくて、ぶつかった側の人間も美人じゃなきゃダメなんだよ）」

ふ、と思わず遠い目になった私は悪くない。

自分の容姿くらい把握してるからね、うん。

須川さんみたいな人の隣に立つには役不足すぎるし、そもそも同じとこに立てる気がしない。

なんていうか、次元が違う。

「江戸川さんは就職活動中、でしたね」

「はい。絶賛就活中です」

「もしよければ、ウチで働きませんか？」

「……え？」

「考え事をしていた、といいましたよね？実は、私の事務所で新しく人を雇おうと思っていたんです。商売柄、堂々と求人誌に乗せるわけにはいかないので、知人を訪ねていたところなんですよ」

そういえば、須川さんって霊能力者なんだっけ。

話をしていると忘れそうになるけど、改めて客観的に見てみると彼は確かに、どこか“特別”だ。
どこら辺が特別なのかって聞かれると答えに困るんだけど……不思議な感じがするんだよね。
美形のオーラだ！って言われちゃえばそれで納得できるんだけど。

「知名度もある程度ありますし、基盤はできたので人を入れるにはいい機会だと思いまして。仕事の内容は貴女の能力に合わせて調整しますし、少しずつ慣れていけば問題はありません。給料は勿論、諸々の手当や保障もしています。必要経費はこちらで持ちますし、悪い条件ではないと思うのですが……」

「悪いどころか好条件すぎて怖いんですけど……そ、それに！私なんかを雇うより、もっとこう、能力の高い人とかそこらへんゴロゴロしてますよ？そりゃ、雇って貰えると助かりますけど、生まれてこの方、一度もお化けとか幽霊とかそういうのみたことないし」

「能力が高いだけの人間なら探せばいくらでもいるでしょう。ですが、周囲に馴染みにくい場合が多いんです。正し屋は業界内ではお

そらく、頂点といっても過言ではないほどの実力があります。ただし、これはあくまで我々の領域……つまり限定的なものなのでしかない」

「んと、つまり、普通の人にも気軽に足を運んでもらえるようなお店にしたいから、普通の人間がほしいってことですか？」

「ええ、一言で言ってしまえばそうなります。祭りのこともありますし、地域には馴染んでおかないと今後、かなりやりにくい。そこで、正し屋の周囲の方に親しみを持っていただけるような人材を探していたんです」

な、なんだか過度の期待がかけられているような気がする！！親しみやすい、っていうのは人によるだろうし、そういうのはやっぱり美人に任せるべきだと思うんだよね。いや、話しかけにくいのはわかるけど話してみたら意外と…みたいな展開がいいんじゃないか！

黙り込んだ私に、彼は複数の紙を差し出した。

つ、次は何？もしかしてこの店の料理って物凄い高かったりした？！

「雇用の条件です。記載している給与は手取りなので毎月最低でもこの金額が口座に振り込まれます。休みは基本的に週休２日制ですが祝日がある場合は祝日分も休みとします。有給は１年で１２日、といったところでしょうか」

「すいません、今日からよろしくお願いします！！」

「……他にも条件がいくつかあるんですが、見なくてもいいんですか？」

「百聞は一見にしかず、です！それに、なんとかなりそうな気もするし」

白状すると、書面に書かれていた給与の金額を見た瞬間に決めま

した。
初任給でこれはない！これはないよ！！しかも手取りでこの金額とか破格すぎる。
こ、これなら奨学金だってあっという間に返せる気がする。
べ、別にお金に目がくらんだんじゃないよ！
説得力はないけど、霊能力者の人がどんな仕事するのかも気になるし、普通とはちょっと違う職業って誰でも一度は憧れると思うんだよね。
私もお化け屋敷とか大嫌いだけど、怖い話は好きだし、テレビの心霊特集とかもよく友達とみてた。
肝試しの経験はないし、コックリさんとかもやったことはないけど、興味はあった。
ありきたりだけど、霊能力とかがあれば、なんて想像して友達と盛り上がったこともあるし。

「では、この契約書に署名をお願いします。実印は持っていますか？」
「えーと、たしか鞄に……あ、みっけ！えーと、ここに押せばいいんですか？」

「はい――――――……これで契約成立、ですね」

「もうこれでハローワークと大学の就職課を往復しなくていいし、求人雑誌とにらめっこしなくてもいいんだ。それに動きにくいスーツも足痛くなるヒールともおさらばできるって、こんなに嬉しいことだったんですね」

少し大げさじゃないですか？と苦笑する須川さんに、そんなことない！就活って凄く大変なんですよ！？と苦労談を力説した。美形の苦労は私にはわからないけど、同様に美形は私たちの苦労なんて微塵もわからないのだ。

「なんだぁ？お前、こいつの下で働くのかよ」

「ついさっき、就職完了しました。これで私も堂々たる新社会人の

仲間入りです」

どうだ！と胸を張っていると頭をゴワシッと掴まれて、そのままぐるんと半回転させられる。
首がグキッていったよ！あだだだ、もげる！もげるって！！！
須川さんに背を向ける形で、私は上半身を捻る羽目になった。
うわ、最近というか運動なんて殆どしてなかったからバキッていったよ。やばいな、これ。

「喜んでるとこ、水差すよーで悪ィが、コイツ、かなりアレな性格してんぞ」

「あ……アレ、ですか？」

現実逃避をし始めた思考を現実に引き戻したのは、近くで聞こえる超重低音。
な、なんか、すごくエロまっちょりしてる！体の芯に響くっていうか、色々危険だよこの声！
頭にあった手がいつの間にか肩をつかんでいる。に、逃げられない！

「見た目に騙されんだよ、特に女はな。ちまっこいのにゃ、コイツの面ァはあんま好みじゃなかったみてぇだけどな」

「いや、好み以前に美人過ぎて怖いっていうか、あの、なんていうか世の中の不条理をうっかり覗いちゃった感じがします。隣に並んで歩けば、部下っていうより召使いかお手伝いさん見習いにしかみえません」

「よし！よく言った。ま、こんだけ図太けりゃ大丈夫だろ」

ペイッと元の向きに戻された私の正面には、相変わらずキラキラした笑顔の須川さん。
後ろで大男さんの狼狽えたような声が聞こえるけど、なんでそんなに慌てる必要があるんだろう？なんて考えていると、頭に衝撃。
正確に言えば頭を支えている首に大ダメージだ。

「あだだだだだ！！い、痛いっ！ち、縮む～～～ッ！！！」

「し、しっかしあれだな！中学生だか高校生だかは知らんが、最近のガキは随分しっかりしてらァ」

「雅。いい加減に叩くのをやめなさい。貴方のところの修行僧ならまだしも、女性なんですよ？」

「いや……あの、それより、私、成人して数年経過してるんで、ガキはちょっと」

「はァ？」

「そういえば、この生年月日からいくと成人していますね」

大男さんの反応にも傷つくけど、そういえばって須川さん……貴方もさりげなく酷いと思います。
会話がぴたりと止まって、音は店内に流れるＢＧＭだけになった。
うわぁ、沈黙って重かったんだね！

「――――――……さて、随分長居をしてしまいましたね。江戸川さん、事務所には明日、ご案内いたします。引っ越しも同時にする予定なので家に帰り次第、荷造りをお願いします。家具やベッド、その他日用品で必要なものは新しく買い換えましょうか。もし思い入れのある家具などがあれば、引っ越し業者に言ってくださいね」

「え？ちょ、ちょっと待ってください！ひ、引っ越し？」

「ここに書いてあるでしょう。雇用条件の一つ、事務所での住み込み、と」

「ほ、ほんとだ」

「お前、読んでなかったのか？ふつー、目くらい通すだろ？！」

「いや、だって……就職する方が大事だったし」

もし、雇用条件をしっかり読んで躊躇したら踏ん切りがつかなくなりそうだたんだもん。
条件の中に“頑張りようがない”条件があったりなんかしたら、サインはしなかっただろうし。
後でじっくり見ようと思ったんです、なんていっても大男さんは信じてくれなかった。
……たぶん私も、なんだかんだで見ない気がするんだけどさ。

「（引っ越し、かー……心機一転！って感じ。ちょっと不安だけど、何とかなる、筈）」

自分にそう言い聞かせながら、テーブルの上で小さな水溜りを作っているコップを手に取る。

汗をかいたグラスは、ひやりと冷たくて、とんとん拍子で就職したことが嘘でも妄想でもないことの何よりの証明のように思えた。

「（うん、これも、きっと何かの縁だよね。応援してくれてた人に恥ずかしくないように、ちゃんと、がんばろう）」

氷が解けて、中に閉じ込められていたミントの葉がぷかりと浮かんだ水を煽る。

清涼感のあるミネラルウォーターが喉を滑るように落ちていった。

いいカモだなんていわないで（後書き）

悔しくて不貞寝したので更新が遅れました。無念。

ここまで読んでくださってありがとうございました！

次もがんばるぞーい。

閉話　カモはネギをしょっていく？（前書き）

一応、これで序章的なものは終了、の予定です。

さ、触りにしては長かったなー（遠い目

閉話　カモはネギをしょっていく？

私の部屋は今、すっからかんになっていた。

余計なものがなくなって、一番初めの――――――――…なにもない、何も入れない状態になった部屋を見て思わず、ため息がこぼれた。

一般的な女の子よりは少なく、男の人よりも多い荷物はものの1時間ほどで外に運び出された。

ビニールシートの上に広げられた家財道具を見て立ち止まったり、何事かと尋ねる人は多かったけど、比較的ご近所付き合いは良かったので変な誤解は受けなかったと思う。一応、ちゃんと説明したし。

「昨日の今日で引っ越しなんて引っ越しの神様だってびっくりだよ、

きっと」

空っぽになった部屋から出た私は、ブルーシートの上に広がる家財道具を見て回った。
引っ越し業者の人たちが丁寧すぎるほど丁寧に扱っていたのは基本的にホームセンターで買った組み立て式のものだ。
運び出されている最中、物凄く申し訳なく思ったのは言わなくてもわかるだろう。
すっごく申し訳なかった。うん。

「（でも、引っ越しの費用どころか業者さんの手配までしてくれる会社って滅多になに、よねぇ）」

引っ越し宣言を受けたのは昨日。
で、引っ越しは宣言通りに行われた。
驚いたのは、引っ越し業者の人が殆ど全員女性で構成されていたことなんだけど、こっそり話を聞いたらそういう指定を受けたらしい。
まぁ、引っ越しとはいえ男の人が部屋に上がって家具を運び出すのって少し、気後れするし。
一応こんなでも女だから、見えないところの埃とか賞味期限がアレな缶詰とかは見られたくないわけです。

「江戸川さま、室内の確認ありがとうございます。不備などはありませんでしたか？」

「あ、はい。名前を書くのってここでいいんですよね？」

「……、はい。ありがとございました。丁度、鑑定が終わりましたので、確認をよろしくお願いいたします」

恭しく頭を下げた一番偉い人っぽい女の人に見送られ、ビニールシートの前に立っている人に近づく。

敏腕鑑定士！という看板を背負っていてもおかしくない知的美人は私と目が合うとうっすら微笑を浮かべる。
美人だ。問答無用で美人だ。私が男だったら、今この瞬間にどうやって連絡先を聞き出すか考えていただろう。

「お待たせいたしました、電化製品を含む家財道具をすべて算定させていただいた上村と申します。今回の引き取り金額ですがこの金額になりました。確認をお願いします」

「え、こ、こんなに！？い、いいんですか…？これ、殆ど組み立てたものだし、電化製品だって結構長い間使ってのに」

「使用状態が大変良かったのでこの金額になります。同意いただけましたらこちらにサインを」

言われるがままにサインをした私ははっと我に返る。
実は、雇用契約書にサインした後、その場にいた大男さん――――――…もとい、黒山（くろやま）　雅（みやび）さん　――――――…にしこたま怒られたのだ。

契約書の類にサインする前には、必ず隅々まで目を通せ！って。
本気で食べられるかと思った。重低音って、ほんと体の芯に響くね……一瞬、地震かと思った位だし。
今回の引っ越しなんだけど、実は『契約後は速やかに住まいを「正し屋本舗」事務所二階の住居区域へ移し、そこでの生活することに同意する』って雇用条件の欄に書かれてたんだよね。
引っ越し自体はいいとしても契約した翌日に引っ越しっていうのはいくらなんでも焦りすぎだと思う。
何か理由があるのかな、なんて考えたりもしたけど、さーっぱりわからなかったので諦めた。

「（にしても、私にとってホントに大事なものって鞄一個で間にあっちゃうんだなぁ）」

必要最低限の貴重品は友達にもらったアクセサリーと形見のダイヤのネックレス（といっても結婚指輪をネックレスにしたやつだから、ダイヤっていっても小さいんだけどね）、あとは貯金通帳とお財布、携帯電話と充電器、連絡先が書かれた手帳と卒業アルバムが３つだけ。
服や下着といったものは何故か処分するよう言われた。

よくはわからないけど、言われたとおりにしていくうちに大切なものは見事に旅行用のカバンに収まったのだ。なんだか自分がものすごーく、小さい人間のように思えて悲しくなったのはここだけの話だ。

うぅ、鞄一つの青春とか虚しすぎるんですけど。

引っ越し終了を見計らって到着したタクシーの中で、諦めにも似た笑みがこぼれた。

あー、運転手さん、いいんです。放っといてください。

いますっごく荒んでるんで。

よし、こーなったら、あとで甘酒を自棄呑みしてやる！

◇
◇
◇

「……こ、この中から、ですか」

「気に入ったものがないようなら作らせます。希望はありますか？」

私が就職した会社の名前は『正し屋本舗』という少し変わった会社だ。

でも、そうじゃないことがわかった。

変わっているのは『正し屋本舗』という会社ではなくて、経営者――――――そう、須川さんその人だった。

彼の容姿が整っているのは一目見ただけで十分すぎるほどに理解できる。

それに身に着けてる服とかモノから高級感が漂ってるから、お金はあるんだろうなーとは思ってたけどここまでだとは思わなかった。

「……須川さん」

「なんでしょう？」

「多分、ちょっとばかり私と須川さんの金銭感覚にずれがあると思

います」

「そういえばそうですね。先ほどから安いモノばかり見ていますし……これはよくできているように見えますが、まだまだです。あちらに置いてあるものの方が素材も職人の腕も格段に上ですから、あちらの方がいいでしょう」

「ちょ、ま、待ってください！そーじゃなくって……あああ、ストップ！お願いだから早まらないでください！桁っ、桁みて！！一桁どころか二桁多いです！」

「この価格なら安い買い物です。ですが、このデザインは女性には向きませんね。クローゼットはあるのですがもう少し小さめの箪笥と姿見を買いましょうか。木も悪くないですが、陶器製のものもあるようですし、そちらも見て決めた方がよさそうですね」

一人、何かを理解したように頷いたかと思えばすたすたと別の売り場へ歩いていく。

私はそれを追うのに必死だし、追いついたら追いついたで高級家具をポンポン買いそうな彼を止めるのに必死だ。私こんなに疲れる買い物初めてなんですけど！

こんな感じで店内を回って、別の店へ日用品を買いに行く頃にはもう、ほとんど気力は残っていなかった。日用品も高かったけど、家具に比べたらどうってことない。

普段の私なら絶対に躊躇するような値段だったけど、家具店で感覚が麻痺しちゃったんだ、絶対。

「さて、一通り当面の生活に必要なものは揃ったので、少し休みましょうか。昼食もまだでしたし、ちょうどいいでしょう。何か食べたいものはありますか？」

「食べたいものですか……あ、美味しいわらび餅が食べたいです！」

「それならいい店を知っています。そこなら町の案内もできますし、楽しみにしていてください」

花も見惚れるような笑みを浮かべる須川さんを見るたびに、形容しがたい敗北感に襲われながらハイ、と首を縦に振った。
運転手に店の前で止めるように告げ、車の中で正し屋がある町について教えてくれた。

正し屋があるのは、縁町（えにしちょう）というあまり大きくはない町。

面白いのはたった一つの町に、１２ヶ所の公園とそれに通じる社があるらしい。
社に社に通じる道や公園にはその社をつかさどっている神様が好んでいる樹や花が植えられてて、毎月、どこかしらの公園で祭りが開催されるんだって。

これを『 十二月祭り（じゅうにつきまつり）』と呼ぶんだけど、このお祭りは物凄く有名だ。

縁町はお祭りだけじゃなくって、腕のいい職人さんを育成することに力を入れている町だってこともあって、競うように自慢の品を祭りに出店する。だから、いいものが並んで、それが他の街だけじゃなくって海外にまでその評判は轟いている。

「でも、そのお祭りの手伝いって言っても『正し屋』って職人さん、いないですよね？何を手伝うんですか？」

「依頼されているのは神を迎える準備と神卸しまで、ですね。後は呪符や御守りの類を社で売ってもらうくらいでしょうか？」

すいません、神様とお知り合いなんてきいてないんですけど。

ひくっと口元がひきつったのを自覚した。

でも、もう就職してしまったものは引き返せないので早く慣れる

ように頑張ろうと思う。
なんか立派なこと言ってるように聞こえるかもしれないけど、ぶっちゃけ私にできるのはこの位しかないんだよね！

こうして、私は目くるめく（？）非日常と日常の境目へと足を踏み入れちゃったんです。たははー

閉話　カモはネギをしょっていく？（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます！
これで一応、序章みたいなものは終わりです。次から、なんやかんやで癒し成分入れていこうかなぁ…等と目論んでいるので、もしよければ暇つぶしにでも読んでやってください。

ＰＳ．お気に入り登録してくださっている方がいるらしいことに気付きました。思わず、目薬さしてからもう一回確認しちゃったほど…。
ありがたや～、ありがたや～。

いや、あの、本当にありがとうございます！がんばるぞー、ふぁうとー！

備考と補足があります。
…小説外で説明する必要がなくなるくらいの文才が欲しい（ボソッ

◎　十二月（じゅうにつき）祭り　◎
正し屋がある縁町は、職人による伝統工芸や日用雑貨の他にも月の最後３日間で催される“月祭り”という祭りが有名。
　これらはひと月を無事に過ごせたことに感謝してその月を司っている神様への感謝の気持ちを表す為に昔から行われていた。今現在

はその意味合いが半分、職人たちの腕を競う、もしくは限定品の商品を売り買いする機会として認識されている。

洒落にならない森林浴（前書き）

正し屋での生活（仕事？）がスタートです。

世の中上手いことばかりではありませんよねー。

洒落にならない森林浴

今一度（いまいちど）、神様に嫌われるようなことをしたのか聞いてもいいですか。

私が『正し屋本舗』という一風変わった会社に就職したのは、三日前のこと。

三日前に契約書にサインして、二日前に引っ越しを終え、昨日は町の人に挨拶して回った。
正し屋のある縁町は、古き良き日本と現代の技術をうまく組み合わせた風情ある町として有名なのは日本国民なら誰もが知っている。

でも、聞くと実際に見るとのではやっぱり違う。
職人さんの町だって聞いてたから、イメージとしては怖い顔の職人さんだらけで緊張感にあふれてる筈だ、と思ったんだけど……凄く優しかったり、気持ちのいい人だらけだった。
仕事をしてる時はイメージ通りの顔になるんだけど、仕事をしてない時は話しかけやすいおじさんだったりおじいちゃんだったりする。
お店を仕切っている奥さんは、気前のいいお母さんみたいな感じで、すっごく買い物しやすそうだったんだよね。
食べ物も美味しいし、景色は綺麗だし、文句なんてあるはずない。
……甘味処も多いもんね。

で、だ。

本来なら、今この時間は確実に正し屋で仕事をしている筈だった。

整理して欲しい書類があるっていってたし、その為にわざわざ最新のパソコンまで買ったから、てっきり初仕事は書類の整理とデータ入力だと思ってたのに。

「研修するにしたって、森はないとおもいまーす」

なんかもー……笑うしかない。
ご飯を食べた後、出かけるから車に乗るように言われて車に乗ったまでは覚えてる。
で、気づいたら見覚えのない森の中にいた。しかも一人ぼっちで。
なんだこれ。
見覚えがないのは途中で爆睡した私が悪いんだけど、お腹はいっぱいな上に、隣から優しい感じの美声で「時間がかかりますから、眠っていても構いませんよ」なんて言われたら即寝落ちだと思う。
一人寂しく、森の中で小さな主張をしてみたけど、やっぱり何の返事も突っ込みも帰ってこなかった。
うぅ…虚しい。せめて友達と一緒なら豪快かつ華麗に突っ込んでくれるのに！！

「にしても、なんで森なんだろ？事故ったって訳じゃなさそうだしなぁ」

だって、事故なら近くに車が転がってたり、血痕的なものがあってもおかしくない。

それに事故るなら大体は崖とかに気付かなくってバーンっ！ってなると思うんだけど勿論、崖なんてない。

ちょっとした溝？とか段差みたいなものはあるんだけど、それで事故るとは思えなかった。

だって、木が生い茂ってる所為で車が通れるような幅がない。

立ち上がって周りを見渡してみたけど、湿ったような土と苔の生えた太い木が無数に生えているだけだった。

地面に倒れてる木もあるんだけど、座る気にはなれない。

まだ日中なのに殆ど陽の光が差し込まない所為で、カビとか生えてそうなんだよね。

座った瞬間にぬめっとして、つるっといったらやだし。

「て、うわぁあ?！なんでこんなとこに木が……れ?木じゃない」

何かに躓いて、どうにか転ばずに済んでほっと胸をなでおろした私の視界に飛び込んできたのは、初の人工物。

頑丈な作りで、なんだか沢山お菓子が入りそうな登山用リュックサック。

誰のだー?落し物ですよー！なんて叫んでみたけど、当たり前のように返事はなかったから、中身をちょーっと見せてもらうことにした。

「なんか生きるのに必要なものがいっぱい入ってる……って、この高そうな封筒！須川さんの手紙だ！」

私の中ではもう、高そうなもの＝大体須川さんの仕業っていう方程式が完成している。
一緒に買い物するには悟りが必要なんだよね。

いそいそと手紙をあけて薄暗い森の中で読み上げる。
普通なら声に出して読んだりしないんだけど、声でも出さないとやってらんないんだよ。察して欲しい。

「むー、なになに―？　『　優君へ　　突然ですが、この森を自力で抜けていただきます。用意したのは水と方位磁石（特別製なのでなくさないように。森を出られなくなりますよ）、地図と食糧、あとは携帯用の図鑑が２冊、携帯鍋、ナイフ、御守りと懐中電灯です。火をつけるマッチも入っていますが、山火事にならないように後処理はしっかりしてください。貴女なら多分、恐らく、八〇％程度は大丈夫だと思いますが十分気を付けるようにして下さいね。健闘を祈っています　　ＰＳ．到着地点は食事が美味しいことで有名な旅館です。甘味も用意しておくので頑張ってくださいね　』　って、な、なんか突っ込みどころ満載過ぎて、突っ込む気力がまるでおきないんですけど」

ちらっとカバンの中身を確認したけど、確かに手紙の内容通りのモノが入っていた。
その他に、よくよく調べてみるとリュックには寝袋や毛布も括り付けられてるし、着替えも2着はいたから物凄く困るってことはない。
地図で確認したら川沿いになんとなーく歩いていけば大丈夫っぽいし、川さえ見つかればこっちのものなんだよね～。
有難いことに、今いる現在地のところに印もある。
西とか東とか北とか南とかって地図で見てもさっぱり分かんないけど、方位磁石があるし……大丈夫、だよね？

あ、でも結局ここがどの辺の森なのかさっぱりわかんないままじゃね？なんて気づいたのは五分後でした。

洒落にならない森林浴（後書き）

やっとアップできたー！！

み、短いけどいい…よね。うん、だって章の始まりだし！

うぅ、一日に1話更新を目標にしてるんですけど…執筆速度って上がらないモノですねぇ（遠い目

なにはともあれ、ここまで読んでくださってありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0334y/

正し屋本舗へおいでなさい

2011年11月5日03時03分発行